



# 源氏物語評釈

## 第十二卷

浮舟  
手習  
蜻蛉  
夢浮橋

玉上琢彌

角川書店

源氏物語評釈 第十二卷  
全十四卷

昭和四十三年七月三十日 初版発行  
昭和四十九年五月三十日 四版発行

著者 玉上琢彌

発行者 角川源義

印刷者 村沢達弘

製本者 鈴木俊一

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三  
①一〇二 東京一九五二〇八  
電話東京(六五)セ二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替え致します  
3393-560512-0946(1)

Printed in Japan  
信教印刷・鈴木製本

# 目次

## 凡例 浮舟

- 一 匂宮と中の宮と薫と  
宮なほかのほのかなりし夕べを思し忘るゝ世なし
- 二 正月、宇治より贈り物、匂宮の推察  
正月のついたち過ぎたるころわたりたまひて
- 三 匂宮、大内記と宇治に行く  
わが御方におはしまして、あやしうもあるかな
- 四 匂宮、すき見  
やをらのほりて、格子のひまあるを見つけて寄りたまふに
- 五 匂宮、薫のまねして入りこむ  
ねぶたしと思ひければ、いとう寝入りぬる
- 六 匂宮居続け、右近働く  
夜はたと明けに明く、御供の人来て声づくる
- 七 女と宮との相思  
例は暮らしがたくのみ、霞める山ぎはをながめわびたまふ
- 八 京よりの報告、匂宮帰京  
よさり、京へつかはしつる大夫まゐりて、右近にあひたり

二七

三

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二〇

九 帰邸した匂宮

二条の院におはしまし著きて、女君のいと心うかりし

十 宇治への文通

かしこには石山もとまりて、いとつれ／＼なり

十一 薫、宇治に行く

大將殿、すこしのどかになりぬるころ、例の、忍びて

十二 宮中の詩会

きさらぎの十日の程に、内に詩作らせたまふとて

十三 匂宮、宇治に行く

かの人の御けしきにも、いと／＼おどろかれたまひければ

十四 朝、女をつれ出す

夜の程にて立ち帰りましたまはむも、なか／＼なければ

十五 隠れ家の第二日

御ものいみ二日とたばかりたまへれば、心のどかなるまゝに

十六 匂宮、帰京

かやうの帰さは、なほ二条にぞおはします、いとなやましろ

十七 女の煩悶

雨降りやまで、日ごろ多くなるころ、いと／＼山ち思し絶えて

十八 女、匂宮の文を見る

これかれと見るもいとうたてあれば、なほ言多かりつるを

十九 薫の文

のちの御文には、思ひながら日ごろになること、とき／＼は

二十 匂宮への返事

宮のかきたまへりし絵を、時々見て泣かれけり、ながらへて

二十一 薫への返書

まめ人はのどかに見たまひつゝ、あはれ、いかにながむらむ

三

六

六

九

一〇

一〇

二六

二八

三〇

三三

三三

三五

三六

二十二 薫、女二の宮に諒解を求める 二七

女宮に物語など聞えたまひてのついでに、

二十三 匂宮の計画 二六

つくりたる所にわたしてむ、と思し立つに、

二十四 母君、宇治に来る 二五

大將殿は、う月の十日となむ定めたまへりける

二十五 薫と匂宮の使者おちあう 二九

殿の御文は今日もあり、なやましと聞えたりしを

二十六 薫、文を見る、匂宮を見る 一四

宮、例ならずなやましげにおはすとて、宮たちも皆

二十七 薫、随身の報告をきく 一四

夜ふけて皆出でたまひぬ、おとゝは、宮をさきに立て

二十八 薫の反省 一七

道すがら、なはいとおそろしく、くまなくおはする宮

二十九 宇治に文をやる 一五

われすさまじく思ひなりて捨ておきたらば、かならず

三十 女、薫の文を返す 一三

かしこには、御使の例より繁きにつけても、もの思ふこと

三十一 右近の諫言、その姉の話 一五

まほならねどほめかしたまへるけしきを、かしこには

三十二 警固の士の言 一六

殿よりは、かのありし返りごとをだに宣たまはで、日ごろへぬ

三十三 女、死を決意 一六

君は、げにたゞ今いとあしくなりぬべき身なめり、と思すに

三十四 匂宮よりの文に返事せず 一七

二十日あまりにもなりぬ、かの家あるじ、二十八日に下るべし

三十五 句宮、宇治に行く

宮 かくのみなほうけひくけしきもなくて、かへりことさへ

三十六 右近は会わず、侍従を呼び出す

芦垣のかたを見るに、例ならず、あれは誰ぞ、といふ声々

三十七 句宮あきらめて帰る

夜はいたく更けゆくに、このもの咎めする大の声たえず

三十八 浮舟の思い

右近は、言ひ切りつる由言ひあたるに、君はいよ／＼思ひ乱る

三十九 句宮よりの文に返歌

宮はいみじきこともを宣たまへり、今さらに、人や見む

四十 母よりの文に返歌

京より母の御文もてきたり、ねぬるよの夢に、いとさわがしく

四十一 乳母右近の心配

めのと、あやしく心ばしりのするかな、夢もさわがし

## 蜻蛉

一 女、姿を消す

かしこには、人々、おはせぬを求めさわげど、かひなし

二 右近と乳母の悲しみ

泣く／＼この文をあげたれば、いとおぼつかなさに

三 句宮、使者をつかわす

宮にも、いと例ならぬ、けしきありし御返り、いかに

四 時方来たつて侍従と語る

かやすき人は、とくいきつきぬ、雨少し降りやみたれど

一六九

一六八

一六七

一六六

一六五

一六四

一六三

一六二

一六一

一六〇

一五九

- 五 乳母の嘆きに、時方事情を悟る  
うちにも泣く声々のみして、めのとなるべし、あが君や
- 六 母君も来る  
雨のいみじかりつる紛れに、母君も渡りたまへり
- 七 右近と侍従、母君らに事情を語る  
侍従などこそ、日ごろの御けしき思ひいで、身をうしなひ
- 八 葬送のまね  
大夫内舍人など、おどしきこえし者どもも参りて
- 九 右近の恐れ  
かゝる人どもの言ひ思ふことだにつゝましきを
- 十 薫、石山参籠、宇治に使者  
大将殿は、入道の宮のなやみたまひければ、石山に
- 十一 薫の後悔  
殿は、なほいとあへなくいみじ、と聞きたまふにも
- 十二 匂宮の嘆き  
かの宮はた、まして二三日はものもおぼえたまはず
- 十三 薫、匂宮を見舞う  
宮の御とふらひに、日々に参りたまはぬ人なく
- 十四 薫、宇治の女の話をする  
やうく世の物語きこえたまふに、いとこめて
- 十五 薫の反省  
いみじくも思したりつるかな、いとはなかりけれど
- 十六 四月、時鳥に、薫と匂宮と贈答  
月たちて、今日ぞ渡らまし、と、思しいでたまふ日のゆふぐれ
- 十七 匂宮、中の宮に打ち明ける  
女君、このことのけしきは、みな見知りたまひてけり
- 一九  
二〇五  
二〇七  
二二  
二二五  
二三  
二三  
二三  
二三  
二三  
二三  
二二五  
二二七  
二二七  
二二九



十八 匂宮、時方を宇治につかわす 二四〇

いと夢のやうにのみ、なはいかで、いとにはかなりけることに

十九 侍従、右近に代わつて出京 二四二

大夫も泣きて、さらに、この御中のこと、こまかに知りきこえさせ

二十 匂宮、侍従と語る 二四三

宮は、この人參れりと聞し召すも、あはれなり、女君には

二十一 匂宮、侍従に贈物 二四七

なにばかりのものとも御覽せざりし人も、むつまじくあはれに

二十二 薫、宇治に行き、右近と語る 二四八

大將殿も、なはいとおぼつかなきに、思しあまりておはしたり

二十三 薫の諒解 二五〇

かうぞ言はむかし、しひて問はむもいとほしくて、つく／＼と

二十四 薫、宇治を去る 二六三

あざり、今は律師なりけり、召して、この法事のこと掟てさせ

二十五 薫、女の母に使者をつかわす 二六四

かの母君は、京に子生むべきむすめのことにより、つゝしみさわけは

二十六 常陸の守、事情を知る 二七二

かしこには、常陸の守、立ちながら来て、折しもかくてゐたまへる

二十七 四十九日の法事 二七三

四十九日のわざなどせさせたまふにも、いかなりけむことにかは

二十八 その後の匂宮と薫 二七五

ふたりの人の御心のうち、ふりず悲しく、あやにくなりし御おもひ

二十九 一品の宮つきの小宰相と薫 二七七

きさいの宮の、御きやうぶくの程は、なほかくておはしますに

三十 中宮、六条の院で法花入講 二八二

はちすの花の盛りに、御八講せらる、六条の院の御ため、紫の上など

- 三十一 西の渡殿の女一の宮を、薫すき見する  
いつかといふ朝座にはてて、御堂のかざり取りさけ、御しつらひ
- 三十二 薫、女二の宮を女一の宮と比較する  
つとめて、起きたまへる女宮の御かたち、いとをかしげなめるは
- 三十三 薫、中宮に参上、匂宮を見る  
その日は暮らして、またのあしたに大宮に参りたまふ
- 三十四 薫、女一の宮に近づこうとする  
大將も近く参りよりたまひて、御八講の尊くはべりしこと
- 三十五 中宮方で宇治のうわさ  
姫宮は、あなたに渡らせたまひにけり、大宮、大將のそなたに参り
- 三十六 薫の反省  
そのうち、姫宮の御方より二の宮に御消息ありけり、御手など
- 三十七 匂宮、侍従を中宮に出仕さす  
心のどかに、さまよくおはする人だに、かゝる筋には、身も苦しき
- 三十八 式部卿の宮の姫、女一の宮の侍女となる  
この春うせたまひぬる式部卿の宮の御むすめを、まゝ母の
- 三十九 六条の院での中宮の生活  
この院におはしますをば、内よりも広くおもしろく住みよきもの
- 四十 秋、侍従、薫と匂宮を見る  
涼しくなりぬとて、宮、内に参らせたまひなむとすれば
- 四十一 薫、東の渡殿に女房と語る  
ひんがしの渡殿に、あきあひたる戸口に人々あまたあて
- 四十二 夜、薫、西の渡殿に女房と語る  
例の西の渡殿を、ありしにならひて、わざとおはしたるもあやし
- 四十三 薫、宮の君と語る  
宮の君は、この西の対にぞ御方したりける、若き人々のけはひ

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

四六

四七

四八

四九

五〇

五一

五二

五三

五四

五五

五六

五七

五八

五九

六〇

六一

六二

六三

六四

六五

六六

六七

六八

六九

七〇

七一

七二

七三

七四

七五

七六

七七

七八

七九

八〇

八一

八二

八三

八四

八五

八六

八七

八八

八九

九〇

九一

九二

九三

九四

九五

九六

九七

九八

九九

一〇〇

一〇一

一〇二

一〇三

一〇四

一〇五

一〇六

一〇七

一〇八

一〇九

一一〇

一一一

一一二

一一三

一一四

一一五

一一六

一一七

一一八

一一九

一二〇

一二一

一二二

一二三

一二四

一二五

一二六

一二七

一二八

一二九

一三〇

一三一

一三二

一三三

一三四

一三五

一三六

一三七

一三八

一三九

一四〇

一四一

一四二

一四三

一四四

一四五

一四六

一四七

一四八

一四九

一五〇

一五一

一五二

一五三

一五四

一五五

一五六

一五七

一五八

一五九

一六〇

一六一

一六二

一六三

一六四

一六五

一六六

一六七

一六八

一六九

一七〇

一七一

一七二

一七三

一七四

一七五

一七六

一七七

一七八

一七九

一八〇

一八一

一八二

一八三

一八四

一八五

一八六

一八七

一八八

一八九

一九〇

一九一

一九二

一九三

一九四

一九五

一九六

一九七

一九八

一九九

二〇〇

二〇一

二〇二

二〇三

二〇四

二〇五

二〇六

二〇七

二〇八

二〇九

二一〇

二一一

二一二

二一三

二一四

二一五

二一六

二一七

二一八

二一九

二二〇

二二一

二二二

二二三

二二四

二二五

二二六

二二七

二二八

二二九

二三〇

二三一

二三二

二三三

二三四

二三五

二三六

二三七

二三八

二三九

二四〇

二四一

二四二

二四三

二四四

二四五

二四六

二四七

二四八

二四九

二五〇

二五一

二五二

二五三

二五四

二五五

二五六

二五七

二五八

二五九

二六〇

二六一

二六二

二六三

二六四

二六五

二六六

二六七

二六八

二六九

二七〇

二七一

二七二

二七三

二七四

二七五

二七六

二七七

二七八

二七九

二八〇

二八一

二八二

二八三

二八四

二八五

二八六

二八七

二八八

二八九

二九〇

二九一

二九二

二九三

二九四

二九五

二九六

二九七

二九八

二九九

三〇〇

三〇一

三〇二

三〇三

三〇四

三〇五

三〇六

三〇七

三〇八

三〇九

三一〇

三一一

三一二

三一三

三一四

三一五

三一六

三一七

三一八

三一九

三二〇

三二一

三二二

三二三

三二四

三二五

三二六

三二七

三二八

三二九

三三〇

三三一

三三二

## 手習

- 一 横川の僧都の母尼、長谷参詣  
その頃、横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人  
三九
- 二 帰途発病、僧都下山、宇治の院に宿る  
ことども多くして、帰る道に、奈良坂といふ山こえけるほど  
四〇
- 三 僧都、宇治の院に怪を見る  
まづ僧都わたりたまふ、いといたく荒れて、恐ろしげなる  
四一
- 四 僧都、人を見て、助ける  
僧都、まことの人のかたちなり、その命絶えぬを見る／＼  
四二
- 五 僧都の妹尼、介抱に努める  
御事寄せておりたまふ程、いたう苦しがりたまふとてのゝしる  
四三
- 六 八の宮の姫の葬送のうわさ  
二日ばかり籠りゐて、二人の人を祈り加持する声たえず  
四四
- 七 一行、小野に帰る  
尼君、よろしくなりたまひぬ、かたもあきぬれば  
四五
- 八 女、回復せず  
かゝる人なむゐてきたるなど、法師のあたりにはよからぬ事  
四六
- 九 僧都、下山して加持する  
うちへかゝつたかゝ程に、四五月も過ぎぬ、いとわびしう  
四七
- 十 女、回復し、回想し、出家を望む  
さうじみのこゝちはさわやかに、いさゝか物おぼえて見まはしたれば  
四八
- 十一 尼の不安  
夢のやうなる人を見たてまつるかな、と、尼君は喜びて  
四九

十二 小野の秋

むかしの山里よりは、水の音もなごやかなり、作りさま

十三 尼の婿、中将来る

尼君の昔のむこの君、今は中将にて物したまひける

十四 中将、横川に登り、弟の禪師と語る

中将は、山におはしつきて、僧都もめづらしがりて

十五 中将、帰途ふたたび立ち寄る

またの日帰りたまふにも、過ぎがたくなむ、とて、おはしたり

十六 中将、小鷹狩のついでに立ち寄る

ふみなどわざとやらむは、さすがにうひ／＼しう、ほのかに見し

十七 中将の歌に、女こたえず

入りても、なげななし、なはいさゝかにても聞えたまへ

十八 中将の笛に、大尼君和琴をひく

こゝかしこうちしはぶき、あさましきわなき声にて

十九 中将の文に、尼の返歌

これにことみなさめて、帰りたまふほども、山おろし吹きて

二十 尼君、初瀬参詣

九月になりて、この尼君初瀬にまうづ、年ごろ、いと心細き

二十一 留守の人々

しのびてといへど、みな人したひつゝ、こゝには人少なにて

二十二 中将、来訪

月さし出でてをかしき程に、ひる文ありつる中将おはしたり

二十三 母尼の部屋に逃げこむ

あやしきまで、つれなくぞ見えたまふや、とて、入りて見れば

二十四 半生を回想

昔よりの事を、まどろまれぬまゝに、常よりも思ひつゞくるに

三六

三九七

四三

四四

四一九

四二四

四三四

四四二

四四六

四五〇

四五三

四五八

四六二

二十五 僧都、下山

げすくしき法師はらなどあまた来て、僧都今日おりさせ

二十六 出家を望む

立ちて、こなたにしまして、こゝにやおはします、とて

二十七 剃髪

はさみとりて、くしの箱のふたさし出でたれば、いづら、大徳たち

二十八 人々うらむ

みな人々いでしづまりぬ、よるの風の音に、この人々は

二十九 手習い

つとめては、さすがに人の許さぬことなれば、変りたらむ

三十 中将の歌に返歌

同じすちのことを、とかく書きすさびゐたまへるに、中将の御文

三十一 帰宅した尼君の悲嘆

物まうでの人帰りたまひて、思ひさわぎたまふこと限りなし

三十二 一品の宮の御病氣回復

一品の宮の御なやみ、げにかの弟子のいひしもしるく

三十三 僧都、中宮に、宇治の女發見を語る

御物のけのしふねきこと、さまゝに名のるが恐ろしきこと

三十四 僧都、帰途、小野に寄る

姫宮おこたり果てさせたまひて、僧都ものぼりぬ

三十五 中将、尼姿をかいま見る

いふかひなき人の御事を、なほつきせず宣たまひて

三十六 中将、世話を申し出る

世の常のさまにはおぼしはゝかる事もありけむを

三十七 出家後の女

思ひ寄らずあさましき事もありし身なれば、いとうとまし

四六七

四七二

四七七

四八二

四八四

四八六

四八九

四九一

四九三

四九九

五〇七

五一二

五一四

三十八 新年の小野

年もかへりぬ、春のしるしも見えず、こほりわたれる水の

三十九 大尼君の孫、紀伊の守来訪

大尼君のむまこの紀の守なりける、この頃のぼりて、来たり

四十 薫のうわさ話

またいふやう、まかりのぼりて日ごろになりはべりぬるを

四十一 宇治の一周忌の布施の仕立て

忘れたまはぬにこそは、と、あはれに思ふにも

四十二 薫、女の遺族の世話をする

大將は、このはてのわざなどせさせたまひて、はかなくてもやみ

四十三 薫、明石の中宮に宇治の話をする

雨など降りてしめやかなる夜、きさいの宮に参りたまへり

四十四 中宮の命で、小宰相、薫に僧都の話を伝える

小宰相に、しのびて、大將、かの人のことを、いとあはれと思ひて

四十五 薫、中宮と語る

あさまじうてうしなひはべりぬ、と思ひたまへし人

四十六 中堂に行き、横川の僧都を訪おうと思う

月ごとの八日は、必ず尋きわさせさせたまへば

夢浮橋

一 薫、叡山参詣、翌朝横川に行く

山におはして、例せさせたまふやうに、経仏など供養

二 横川の僧都に女のことをきく

すこし人々しつまりぬるに、小野のわたりに、知りたまへる

五八

五九

六〇

六一

六二

六三

六四

六五

六六

六九

七〇

三 小野の尼、薫の行列の火を見る

小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向かひて、まぎるゝ

四 薫、小君を小野にやる

かの殿は、この子をやがてやらむ、と思しけれど、人目多く

五 小野に僧都より文

かしこには、まだつとめて、僧都の御もとより、よべ大将どのの

六 小君、小野に来る

あやしけれど、これこそは、さはたしかなる御せうそこならめ

七 小君の報告に、薫、失望

いづしかと待ちおはするに、かくたど／＼しくて帰り来たれば

夢浮橋の巻を読み終わって

五七

五八

五九

六〇

六一

六二

さしえ目次

浮舟（中扉） 明融摸写本『源氏物語』浮舟巻頭

絵入源氏物語 「ふかきころにまつと知らなむ」

年中行事絵巻第三巻 膳弓

年中行事絵巻第四巻 内裏

信貴山縁起第二巻 狩衣

東福寺の森

隆能源氏絵早蕨 「もの折る」

絵入源氏物語 「つとめての程にも、これは織ひてむ」

隆能源氏絵早蕨 「織よ」

石山寺縁起絵第五巻 裁縫

峠の山道

宇治の墓

長谷寺

石山寺

絵入源氏物語 「心をばなげかざらまし命のみ」

絵入源氏物語 「この五位二人なむ、御鷹の口には」

隆能源氏絵東屋(二) 烏帽子直衣

隆能源氏絵竹河(一) 冠直衣

加茂川

宇治川

宇治橋

元 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十



繪入源氏物語

宇治橋断碑

橋姫神社

石山寺縁起絵第一卷 指貫の裾をひきあげた姿

一遍聖絵第四卷

宇治川の舟

絵入源氏物語 「たちばなの小島の色はかはらじを」

一遍聖絵第四卷 「雪の降りつもれるに」

絵入源氏物語  
「ことたがひつゝあやし、と思へど」

一遍聖絵第一卷 「さとびたる声したる犬どもの出で来てのふしるも」

枕冊子絵巻第一段 衣をうしろに引いて歩く女

絵入源氏物語 「あふりといふものを敷きて」

年中行事絵巻第七卷 裾をからげて歩く女

石山寺縁起絵第二巻 あふり

粉河寺縁起絵第五段 馬に乗る女

年中行事絵巻第一巻 下人の齋

浮舟の碑  
(宇治市三室戸寺境内)

蜻蛉 (中扉) 蜻蛉石 (宇治市)

帝釈天（唐招提寺蔵）

三寶絵上卷(前田本)

絵入源氏物語 「かく世づかずうせたまへるよし」

石山寺

法然上人絵伝第四十二卷 石山寺参籠の図

法然上人絵伝第四十二卷 火葬の図

絵入源氏物語 「しのびねや君もなくらむ」